ブー子
ニシジマオ

彼女はブー子。とてもぶたを可愛いがるので僕がそう名付けてあげたのだ。もちろんあだ名である。彼女との付き合いは長く、もう一年位たっただろうか。彼女は僕とのデートのときでさえペットのぶたをつれて来るのだ。

それでね、サチコさんたら毎日人をおどかすのよウオオン、ウオオンとさけぶのよ

そんなに吠えたてて、近所の人たちは迷惑していないかい？

ええ、それは大迷惑よ！

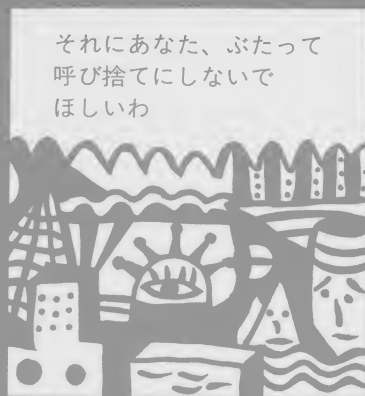
でも…

みんなサチコさんが恐ろしいから、

黙っているのよ

彼女は何だか気味が悪い人だからね

ところで君、

もういいかげんにデートにぶたをつれてくるのはやめにしてくれないかい？

ええ?なぜかしら?
こんなに可愛らしいのに?
それにあなた、ぶたって
呼び捨てにしないで
ほしいわ
おや、なぜだい?
ぶたさんをさげずんで
いるように聞こえるん
ですもの
私そんなこと
嫌だわ
ブー
この通りである。前に
一度思い切って彼女の
ぶたを取りあげたこと
があったが、彼女はそ
のとき子供のように泣
いた。泣きたいのはこ
っちなのに…
そんな彼女にある事件
が起こった。それはう
ららかな日曜日のこと
だった。
さあぶたさん、したくをして
今日は彼とピクニックへ行くのよ
だからお洒落をしてね
まあ、すねたりしておかしい子!
あら、やきもちをやいているの
かしら?ウフフ、大丈夫よ
私は彼のこともあなたのことも
同じくらい大好きよ
ブウ
ブウ
ブウ

あらあら、またうなったりしてもう…

きゃっ！なにをするの？

ブウ

あらあらぶたさんたら、私の口の中に飛び込んだわ！

ああ、ああ、駄目よ言葉を話すことができないわ
おいしいごはんを食べることができないわ
あごがつらいわ
じんじんとつらいわ

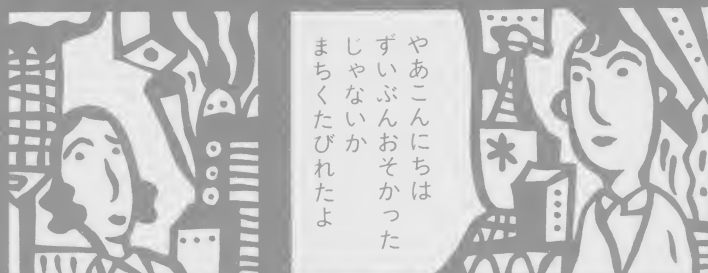
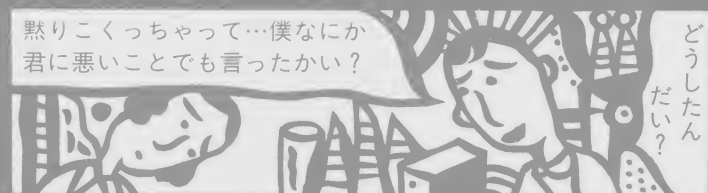
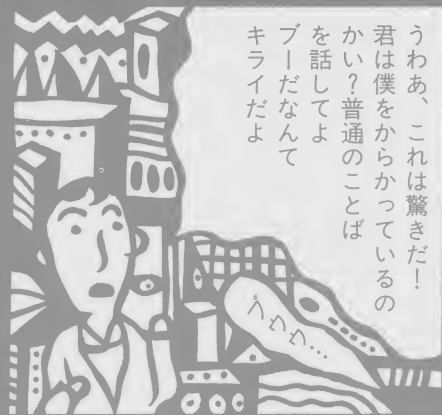
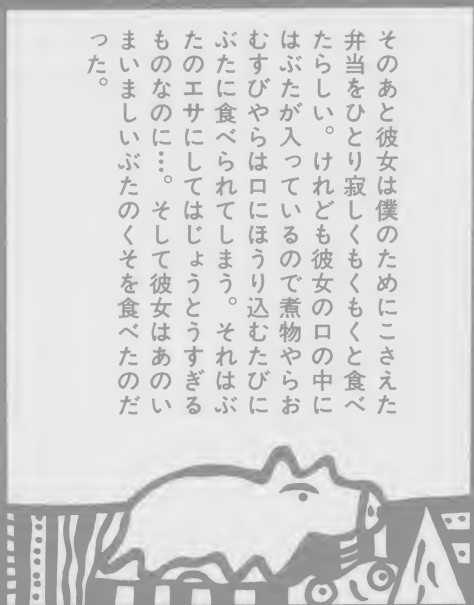
だれか何とかしてちょうだい

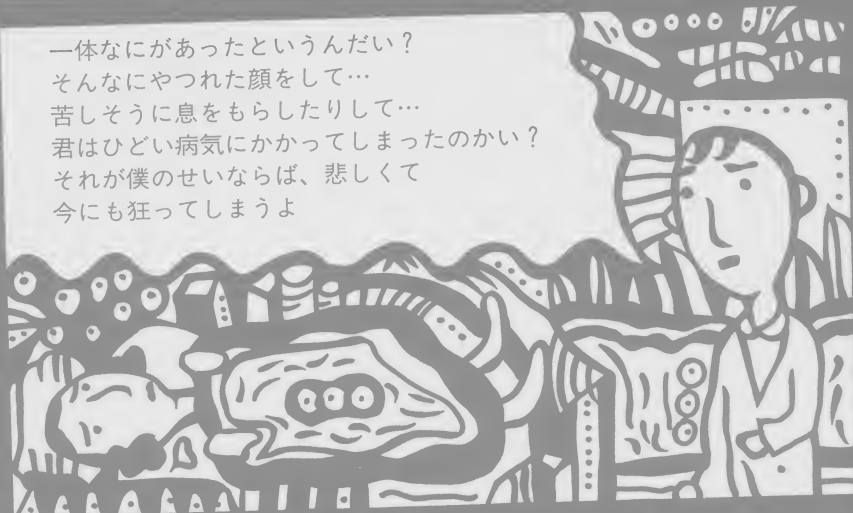
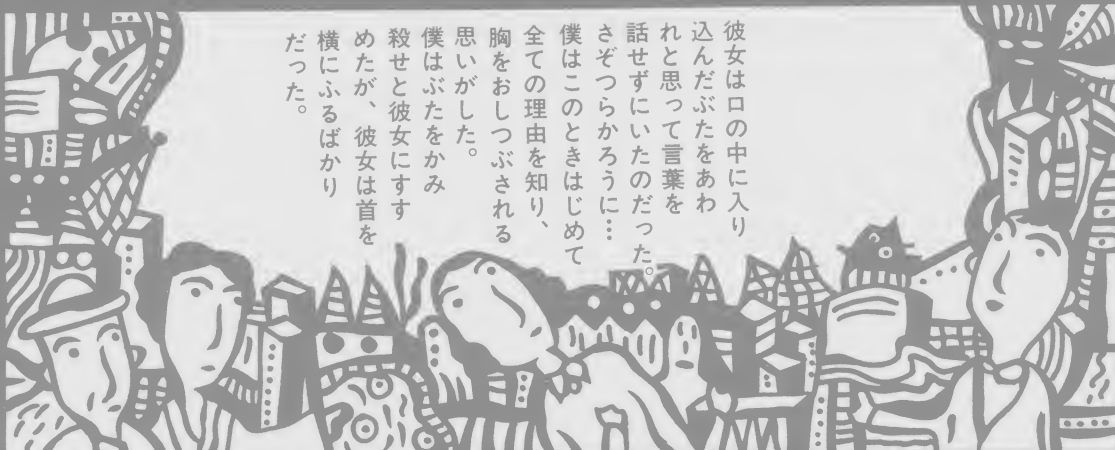
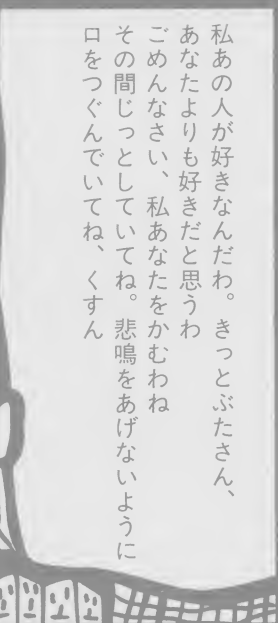
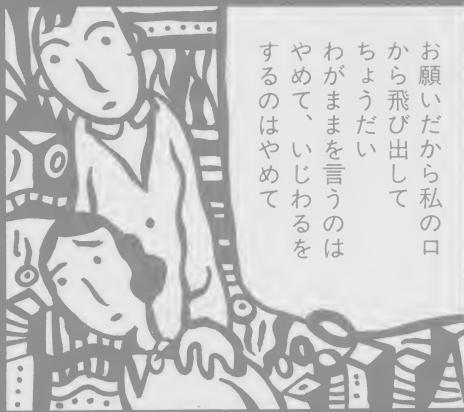
お父さんお母さんたすけてください

ブブウ、ブブウ

ブブウッ

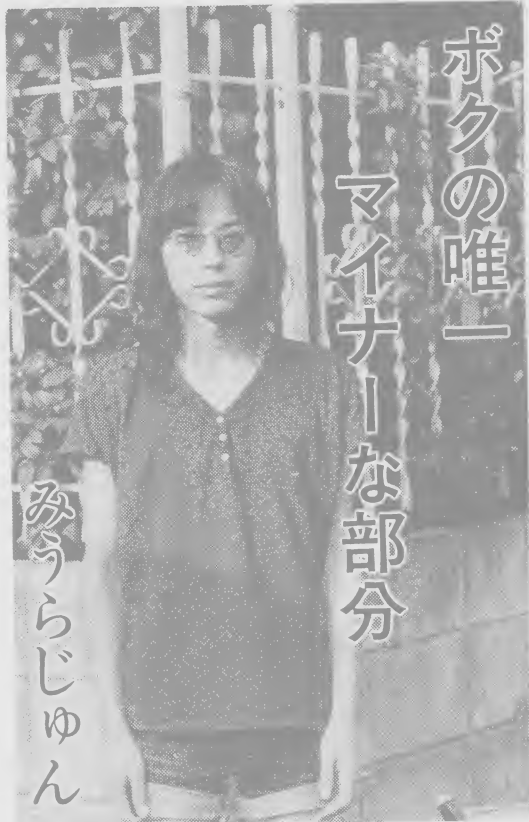
いやだわ 人間の言葉をしゃべれないどうしましょう？

ぶたさんを食べてしまおうかしら？いえいえ残酷だわ
あらもう時間！
約束におくれてしまうわ急いで行きましょう　さあ！はやくはやく
なんと彼女の口の中にぶたが入り込んでしまったのである。ぶた好きの彼女もさすがにこまりはてて、どうにかして取り出そうと四苦八苦するが、これがどうにも出てこない。ぶたはブーと鳴く。とうとう彼女はぶたを口におさめたままやって来たのだった。
やあこんにちはずいぶんおそかったじゃないかまちくたびれたよ
ははは　いいよ気にしてなんかいないさそれよりも僕はとてもうれしいんだよ
なぜなら君は今日あのぶたをつれてきていないからさ！
どうしたんだい？
黙りこくっちゃって…僕なにか君に悪いことでも言ったかい？
なら話しておくれよだんまりになられては困るなあ、君のことが心配になってきた
ブウウ…
ええ？ブウだって？君は変なことを言うんだねぇ

おやまただよ！一体
ぜんたいどうしたんだい？
ブー
うわあ、これは驚きだ！
君は僕をからかっているの
かい？普通のことば
を話してよ
ブーだなんて
キライだよ
ブー
ブー
ブウ…
ええい！もうおつむにきたぞ！人を
馬鹿にするのもいい加減にしたまえ
ブウブウ言っている君は本当に
僕の名付けた通りブー子だね
ブー子なんて知るものか！
これでもう、君とのおつきあいは
終わりにしよう
ブー
さようなら
ブ……
まって！まってちょうだい
ああ……
そのあと彼女は僕のためにこさえた弁当をひとり寂しくもくもくと食べたらしい。けれども彼女の口の中にはぶたが入っているので煮物やらおむすびやらは口にほうり込むたびにぶたに食べられてしまう。それはぶたのエサにしてはじょうとうすぎるものなのに…。そして彼女はあのいまいましいぶたのくそを食べたのだった。

ああ困ったわ
口の自由がきかないから
上手にしゃべれないわ
一度でも無理をして
しゃべろうものなら、
きっとぶたさんをかみ
殺してしまうでしょう
どうしたらいいの
かしら?あら嫌だ
私ったら涙をこぼし
てるわ　うう……
彼にここにいて欲しかった
のに……私の声が
とどくのならもどって
きてくださらない?
あっ駄目!駄目よ!
大声を出したら
ぶたさんをかみ殺して
しまうわ　つらいわ
こんなにつらい気持ちは
はじめてよ
それから数日後の夜、彼女のご両親から電話があった。
彼女がたおれたそうだ。僕は迷わず彼女の家にかけつけた。そう、風よりも速く。あのとき彼女のそばにいてあげればよかった。今さらながらにあの日のことがくやまれた。
お義父さん、お義母さん
彼女はどこですか?
ええ、二階に
います　さあ
急いで
バターン

一体なにがあったというんだい？
そんなにやつれた顔をして…
苦しそうに息をもらしたりして…
君はひどい病気にかかってしまったのかい？
それが僕のせいならば、悲しくて
今にも狂ってしまうよ
ブウウー
あのピクニックの日からなんです。食事をあたえても栄養がつく様子がありませんし、なんだか体が家畜くさいんですよ
君、心あたりはないかね
僕にもわけが分かりません
これは難問です
しかし僕にはどうもあのぶたが怪しく思えてならないのです
ああ！見つけました
何を見つけたんですか？
たしかにあのぶたは怪しかった。日頃から僕はあのぶたを憎んではいたが、だんじてそれが理由ではない。ぶたが死んでもいないかぎり、彼女のそばにいないのはおかしいと思ったからだ。
教えてくれたまえ

ブー
ぶたですよ！
全ての原因は彼女の口に
入り込んだこのぶたにあった
んです、そうにちがいない
まあ、ぶた
トホホぶたとは…
まったく
ブウ…
彼女は口の中に入り
込んだぶたをあわ
れと思って言葉を
話せずにいたのだった。
さぞつらかろうに…
僕はこのときはじめて
全ての理由を知り、
胸をおしつぶされる
思いがした。
僕はぶたをかみ
殺せと彼女にすす
めたが、彼女は首を
横にふるばかり
だった。
はあはあ
苦しいわ
ぶたさん
出ていって
ちょうだい
お願いだから私の口
から飛び出して
ちょうだい
わがままを言うのは
やめて、いじわるを
するのはやめて
私あの人が好きなんだわ。きっとぶたさん、
あなたよりも好きだと思うわ
ごめんなさい、私あなたをかむわね
その間じっとしていてね。悲鳴をあげないように
口をつぐんでいてね、くすん
かくごはできて?

えいっ！
ガヴ
ガヴ
ガヴ
ゆるしてね……
とうとうかんでしまったわ…
きっと口のまわりには血がついているのでしょうね
それがおかしなことに
血液どころか甘いかおりが漂っているんだ
あら、そういえば不思議
口の中には甘い砂糖の味が広がっているわ
ああ
おいしいわ
それにこれ、とっても栄養があるみたい
だって私ったら
どんどん元気になっていくんですもの

アノアハハハハハハハ
それはいいや　もとの君にもどってくれてうれしいよ　けれどもこれではまるでぶたにばかされたみたいだなあ
その夜、僕たちは夜の町へ散歩へ出かけた。月あかりが二人を照らした。あのぶたは何者だったのだろうか。僕たちをむすびつけた天使だったのだろうか。そんな僕たちの思いとは関係なしに、彼女はぶたについての記憶を日ごとになくしているらしい。そしてもう、彼女にはブー子という名はふさわしくなくなったのである。

おしまい

ボクの唯一マイナーな部分

みうらじゅん

入選当時の頃のみうら氏

下北沢の深夜——

田口トモロヲさんとトラブルピーチで朝まで飲んだ。男二人でホモのように盛り上ったのは本当、久しぶりの事だ。

「メジャーとマイナー、二つの道しか無かったらオレは迷う事なくマイナーを選ぶね」

トモロヲさんは言った。

「メジャーとマイナー、ボクもマイナーを選ぶけど、マイナーをメジャーにしたいって思うんだろうなぁー」

ボクは言った。

ボクはたまたまメジャーに比べればマイナーな方が好きなだけだ。それは昔から変っていない。だから、初めっから

「B級が大好き！」

って言う人の気持ちが分らなかった。A級を目指したんだけど、結局B級扱いされたものにボクは魅力を感じてたからだ。

ボクが美大時代、「ガロ」に漫画を持ち込んだ理由は、決して「ガロ」が大好きだったからではない。「ガロしかおまえの漫画は載らない」って友達に言われたからだ。

だからボクは「ガロ」に載るまで持ち込もうと、一年近くボツを食らいながらも毎月描き続けてたんだ。最後の方はもうヤケクソで青林堂の帰りにその足でアポも取らず各出版社を回った。そこでよく分った事だが、面倒臭そうに出てきた編集者に、

「ガロに持ち込んだらいいんじゃない？」ってちょっとバカにしたように言われたことだ。こちとら、ガロのボツ原稿を見せてるのによー！

その頃、初めてボクは「ガロ」が世間的にマイナーだって思われてる事を知った。描きたい事を編集者の打ち合せ無しに描く、くだらないトレンドを意識せずに、我が漫画を描く行為自体、マイナーな行為だって気付いたんだ。

初めて漫画を載っけてもらった時、生れて初めてボクはマイナーの仲間入りした気がした。

「ガロ出身なんですか？」

今でこそ、サブカルチャー好きに支持されるガロだけど、ボクはメジャーとマイナーの間にネズミ男のように居座るサブカルチャーってヤツが大嫌いだ。サブカル気分でガロに持ち込む漫画家が増えてはいけないとボクは思う。

入選作品「ウシの日」扉絵('80年10月号)

ウシの日

我が漫画を描く事、我が漫画を載せるガロもカッコイイ！世間で言われているメジャーとマイナーが部数の違いなら、そんなもの屁でもない。マイナーでしか出来ない表現でメジャーに勝てる漫画を描けばいいだけだ。メジャーとマイナーという言葉がいつか逆転する日を楽しみにしてる。そのためにもボクは世間で言われているメジャーの仕事を趣味でしたい。メジャーに毒を入れて、メジャーをドキドキさせたいんだ。

偶然にもマイナーの仲間入りをさせてもらったガロにボクはとても感謝している。あくまでボクはそういう立場でガロに描かせて頂いている。